

# 胸に迫る土臭さ

32年ぶりの人形浄瑠璃文楽八戸公演が18日、八戸市公会堂でいよいよ開催される。文楽の地方公演は、毎年10月と3月、全国各地で開催されているが、青森県、特に八戸市での開催は本当に久しぶりである。このように



川守田礼子  
八工大准教授

貴重な伝統芸能の鑑賞機会を与えてくださった主催者・関係各位に心より感謝を申し上げます。

人形浄瑠璃文楽は、江戸時代、大坂を拠点として花開いた芸能で、太夫と三味線弾きによる浄瑠璃と、諸国を放浪した操り人形芝居が合体して成立した。平曲や説経節な

## 18日、人形浄瑠璃文楽八戸公演

川守田礼子・八工大准教授寄稿



ど日本の芸能における語り物の歴史は長い。「物語象徴として身近に存在していることは、五生をなぞること。いつの世でも人々の心を慰め、熱狂を生み、思索の種をまいてきた。

また、人形との関わりも古く、古代の土偶から子どもの玩具に至るまで、人形の関わり

で、人の幸せ、健康を祈る象徴として身近に存在している。そのせいか人形浄瑠璃文楽の舞台を拝見して、遠い記憶が呼び起こされるような感覚にとらわれるときがある。

また、人形との関わりも古く、古代の土偶から子どもの玩具に至るまで、人形の関わり

で、人の幸せ、健康を祈る象徴として身近に存在している。そのせいか人形浄瑠璃文楽の舞台を拝見して、遠い記憶が呼び起こされるような感覚にとらわれるときがある。

また、人形との関わりも古く、古代の土偶から子どもの玩具に至るまで、人形の関わり

宝生流能楽師の故近藤乾之助さんが「文楽では何となく野暮ったさが感じられるように思います。人形の遣い方、語り、舞台上で繰り広げられる戦いが素朴という

「すしやの段」は、義経の悲しみを体現する存在として描かれる。「すしやの段」はそのように重厚な見応えのある作品である。続く四段目「道行初音旅」は静御前の作品世界は、きつとある

「すしやの段」は、義経の悲しみを体現する存在として描かれる。「すしやの段」はそのように重厚な見応えのある作品である。続く四段目「道行初音旅」は静御前の作品世界は、きつとある

「すしやの段」は、義経の悲しみを体現する存在として描かれる。「すしやの段」はそのように重厚な見応えのある作品である。続く四段目「道行初音旅」は静御前の作品世界は、きつとある